

関西学院大学 研究成果報告

2022年 11 月 30 日

関西学院 院長殿

所属：文学部
職名：准教授
氏名：坂根隆広

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：アメリカ合衆国 ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	20世紀アメリカ文学と資本主義
研究実施場所	カリフォルニア州アーヴァイン
研究期間	2022年 3 月 26 日 ～ 2022年 9月 19日 6ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

今回の学院留学では、カリフォルニア大学アーヴァイン校英文科のマイケル・ザレイ教授に受け入れていただき、「20世紀アメリカ文学と資本主義」というこれまで取り組んで研究をさらに進めた。同校は私が2007年から2013年まで大学院生として在籍して学位を取得した大学であり、研究施設や図書館等、物理的な研究環境はほとんど当時と変わっていないこともあって、短期間ではあるがスムーズに研究を推進することができ、主に以下のような活動を行った。

まず最も個人的に記憶に残る経験となったのは、4月から6月にかけて、フランスを代表する哲学者・思想家であるカトリーヌ・マラブー教授の大学院セミナーを聴講したことである。マラブー教授は比較文学科の教員であり、大学院の少人数セミナーは本来院生のみを対象とする授業だが個人的に連絡すると聴講を快諾していただき春学期のほぼすべてのセミナーに参加させていただいた。セミナーはポール・リクルの『他者のような自己自身』を読み、マラブー教授による解釈を聞いて受講生が質疑応答するという形式のものであった。全体としては、いわゆる物語的同一性と、自己と他者についての倫理をめぐるリクルの哲学が、アメリカのアイデンティティ・ポリティクスを考えるうえでどのように有益かを探る内容であった。このセミナーを通して学んだリクルの哲学とマラブーによるリクル読解は、アメリカ文学における資本主義の表象を考えるうえで極めて示唆的であり、現在学会発表のために準備しているフィッツジェラルドのエッセイについての論文においても、着想の

根本的土台となっている。

マラブー教授のセミナーと並行するかたちで、4月から6月にかけてR・ラダクリシュナン教授による学部生向けの授業（1回80分を週2回）に参加した。内容はアフリカ系アメリカ文学と思想が中心であり、スレイブ・ナラティブやラルフ・エリソンの小説などの文学作品から、デュボイスのエッセイまで幅広く扱いながら、人種・階級・ジェンダーのインターセクショナルリティを検討するものであった。学部生向けとはいいつつも理論的考察も含めて非常に高度な内容で、私自身の研究にも大変示唆の多い有益な授業であった。学部生向けの授業に参加したのは、米国ではどのように学部生に文学作品および理論を教育しているのかを調査したかったという動機も大きかったのだが、その点においても、講義とグループ・ディスカッションとクラス全体での討論を自在に行き来するラダクリシュナン教授の授業を受講することは非常に勉強になる経験であった。この授業をとおして、資本主義の問題を考えるうえでのアフリカ系アメリカ文学の重要性、とりわけ黒人奴隷の身体の位置および奴隷労働を「労働」と考えてよいか、といった問題がきわめて重要でありながら私の研究の視野では周縁におかれていたことが認識され、ラルフ・エリソンや、近年の重要な作家であるコルソン・ホワイトヘッドの小説および二次資料を集めて調査した。これらについては今後何らかの形で研究成果として発表したいと考えている。

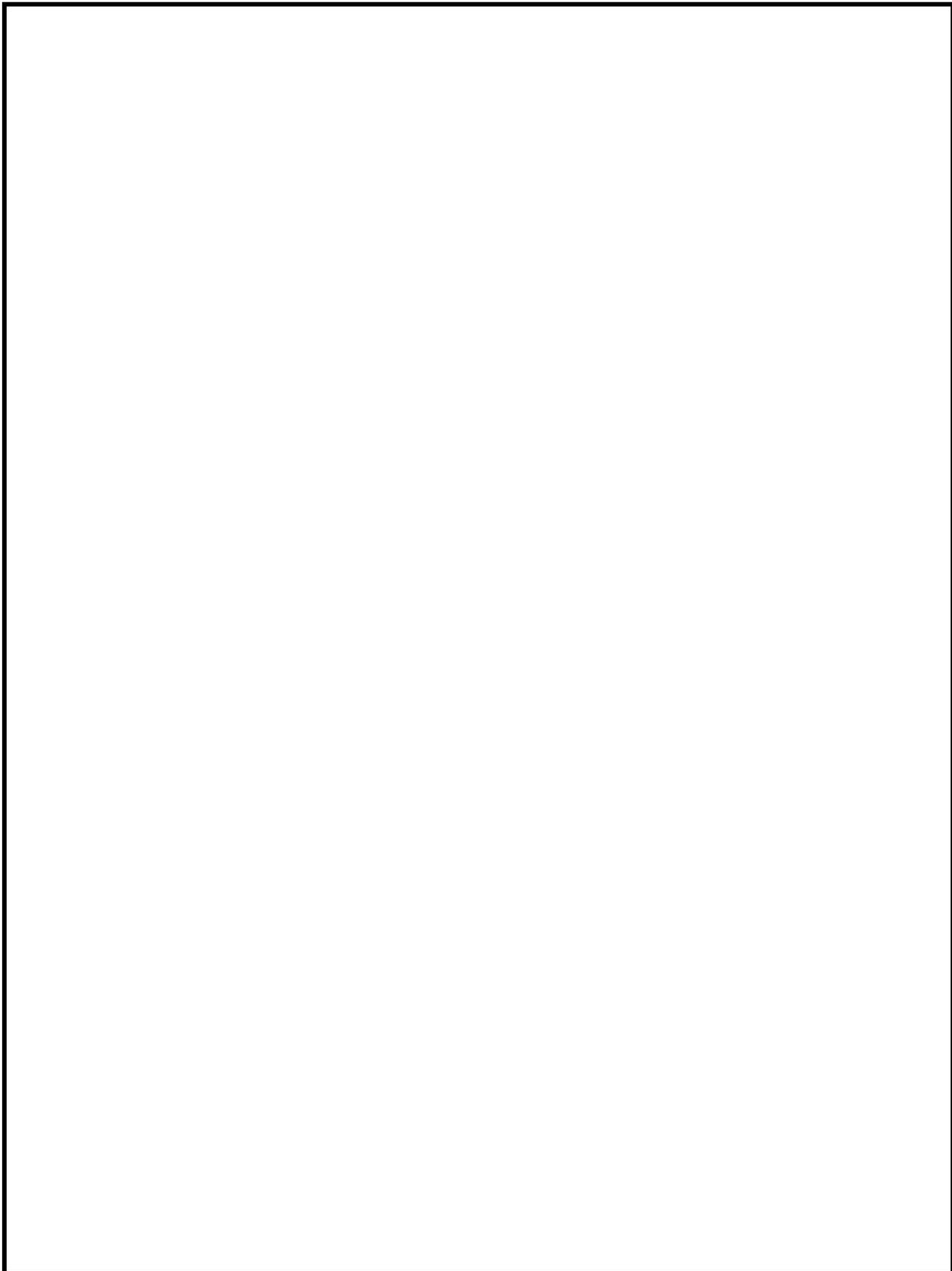
5月の末には、シカゴで開催された、ALA (American Literature Association) の国際大会に参加した。同学会は、アメリカにおける個人作家協会が集結して会議を行う唯一かつ大規模な学会であり、数年のコロナ禍を得てついに学会が対面で開催されることを祝う祝祭ムードの高い学会で、感慨深いものであった。3日間にわたるプログラムでは、ヘンリー・ジェイムズ、フィッツジェラルド、リチャード・ライト、ドス・パソス、メルヴィル、フォークナー等についての発表を聴講し、多くの研究上の示唆を得た。また、サウスネヴァダ大学でモダニズム文学を研究するブレンダン・シャピロ教授とも大会期間中には親しく交流し、研究全般について様々な議論を交わすことができ大変有意義な時間を過ごした。

留学期間全般にかけて、リアリズム文学、自然主義文学とモダニズム文学についての資料収集と調査を継続的に実施できたこともまた大きな収穫である。カリフォルニア大学内であればすべての大学から書籍を借りられるというシステムだけではなく、コロナ禍において急速に進化した一次資料および二次資料の電子化の恩恵を受けながら、大学の図書館に通いつつ、主にハウエルズ、ジュエット、ジェイムズを中心とするリアリズム文学、ノリスやクレインを中心とする自然主義文学、フィッツジェラルド、フォークナーおよびハーレム・ルネサンスの文学、また近年再評価の機運が高まりつつあるウィリアム・マクスウェルらを中心とするモダニズム文学についての文献を可能な限り収集・調査して、資本主義の表象を改めて通時的・文学史的・歴史的な枠組みで把握するための方法論の構築を試み一定の成果を得た。

留学後半では、以上の文献調査を土台としながら、8月から9月にかけて論文執筆に集中し、まず、フィッツジェラルドの後期エッセイを資本主義的という観点から再評価することを主眼とする論考を執筆した。その着想は、マラブー教授のセミナーをとおして学んだリクルの哲学的著作に得ており、資本主義社会における作家のプロフェッショナリズムを友愛の倫理の問題と絡めて論じた。本論考は、12月のアメリカ文学会東京支部例会でその一部を発表し、その後論文として発表する予定である。

上記と並行して、1930年代に発表されたウィリアム・マクスウェルによる *They Came Like Swallows* についての論文を執筆した。1919年のインフルエンザ・パンデミックの影響を描いていることによってコロナ禍においてにわかには再注目されつつある作品であるが、その方法上の問題と感染の主題を、所有によって規定される個人主義 (possessive individualism) という資本主義社会における自我のあり方と関連させながら論じ、そのような自我のあり方を克服しようとする作者の試みについて検討した。本論考については、12月のアメリカ文学会関西支部大会でその一部を発表し、その後論文として発表する予定である。

以上、カリフォルニア州アーヴァインにて実施した主な研究活動について報告する。



以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高
中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に
支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。